タレブ『まぐれ』の要約

寺尾　敦

# 第11章　偶然と脳

私たちの脳は、確率的事象のような複雑な対象に対して、合理的な解を出してくれない。何らかの手っ取り早い方法にとびついてしまう。この章では、こうしたわれわれの限界はどこから来ているのかを議論している。

　われわれの思考は合理的ではないということに、最初に気がついたのはハーバート・サイモンである。日頃からいちいち最適化を行っていたら時間とエネルギーがいくらあっても足りない。だから、代替満足のいく近似解が見つかれば、そこで考えることをやめる。人間の合理性についてのこの性質を、サイモンは「限定合理性」と名付けた。

　カーネマンとトヴァスキーは、われわれは近似解を求めているのではなく、合理的思考とは質的に異なったルールに従っていると主張した。こうしたルールは「ヒューリスティック」と呼ばれる。彼らは実験によって人間の持つ多くのヒューリスティックを明らかにした。

　その後の研究で、私たちの脳には２つのシステムがあると考えられるようになった。システム１は、すばやく、並列処理が可能で、無意識的、情緒的といった特徴を持つ。ヒューリスティックはこのシステムの一部である。システム２は、遅く、逐次処理を行い、意識的、論理的といった特徴を持つ。合理性はこのシステムの一部分である。

　進化心理学は、われわれが確率論を理解できずにヒューリスティックに頼るのは、われわれが本来の生息環境で脳を使っていないからだと考える。人類は、多くの世代にわたって、情報がそれほど多くなく、複雑な確率を計算する必要のない環境（つまり、本来の生息環境）で暮らしてきた。そのころに比べて環境は大きく変わってしまった。しかし、われわれの遺伝子は変化していない。進化心理学者は、われわれは合理性を身につけているが、情報が進化的に不適切な形で提示されるために（たとえば、頻度でなく確率が提示されるために）、その合理性が発揮されないと考える。

　神経生物学者は、われわれの思考は感情に強く支配されていることを明らかにした。人は情緒がなくては意思決定ができない。合理的思考が求められる場面では、われわれはまず情緒を感じて、それから理屈を考えているのかもしれない。

　どのような学術的立場からも、われわれが確率的に正しく思考できていないことは確かである。裁判、マスコミ、市場といった日常世界では、誤った確率的論理が堂々と語られている。著者は、偶然にだまされないよう、いつも用心している。